

オーストラリアにおける世代間交流プログラム —シドニーおよびメルボルン周辺における移民高齢者と子どもの世代間交流を中心に—

家族・地域支援学科 草野 篤子

1. 目的

先進諸国では一様に高齢社会を迎え、特に日本では高齢化率は23%を超え、超高齢社会を迎えている。この様な中で、高齢者と子どもによる世代間交流は、高齢者に役割や居場所を与え、子どもには高齢者からの知恵や英知、技術の伝承、生涯発達モデルを与えられる。昨年までヨーロッパ諸国における世代間交流について報告してきたが、今回はオーストラリアの都市部における高齢者と子どもの世代間交流を明らかにする。またこれを通して、日本における世代間交流学の発展と教育プログラムの一助となることを目的とする。

2. 方法

現地にて学校、ユダヤ文化センターなどの訪問、面接・聞き取り調査を行った。

調査年月日 2012年9月10日から17日

調査地 オーストラリアシドニー市および
メルボルン市周辺地域

3. 結果

(1) シドニー・ユダヤ文化センターにて

教育部長のマリエラ・ストゥラム (Mariela Strum) からホロコーストの生き残りの人の話を聞くことができた。生き残っている人は多くいるが、その中に約20人の語り部がいる。年間17,000人の高校生が、歴史の時間に訪ねてくる。95%の学校は正規の公立校で約500校。残りの5%はユダヤ人学校で、これは20年以上続いている。語り部の話は、約30分間で話せるように訓練している。内容は、1933年から1945年までに起こったこと、おこなったこと、憶えていること、どういう過程でそれらが起こったかなどについてである。時間的な流れは、まず高校生が

センターに到着する、ドキュメンタリー・フィルムを見せる、生き残った人に話をしてもらう、生徒の質問という順番である。生徒の反応は様々である。モラル的に質問できないことも多い。経験の評価については、生き残りの人の話を聞いて、生徒が手紙を書いてきたりすることによって得られる。このプログラムは20年前にこの文化会館が開館されてから毎日行なわれている。さらに、2008年に改築された時に、より理解がしやすくなった。生き残りの人のお話は、毎日、午前2人午後3人といった日程で行っている。

高齢者は、ここに来ることによって、友人や高校生と会える。老人ホームからセンターへ出かけてくる人もいる。また、息子が運転してくる人もある。パソバー (Passover 出エジプト) 以来、ユダヤ人は世界に散らばっている。オーストラリアの人口の0.005%がユダヤ人で、約10万人にのぼる。ちなみに、シドニーの人口は300～400万人であるが、シドニーのユダヤ人口は約40,000人である。

以上のようなセンターでのお話の他にも、高齢ボランティアは、活動をしている。例えば、月曜日には、アレックス (Alex 94歳、男性) はデラックスで瀟灑な老人ホーム「モンテフィオリ」でボランティア・コーディネーターをしている。火曜日には、イボンヌとゾイは、ヘーゼル施設で「人の世話をし、勇気づける仕事」(Courage to Care) をしている。

ユダヤ文化センターでのプログラムは、ニューサウス・ウェールズ (New South Wales) 州の歴史の授業に繰り入れられている。16～17歳の時、

様々な宗教について学ぶが、英語の教科書に入っており、大学入学の時に必要な課題になっている。

歴史の教育課程に入っている人種撲滅などは、人種差別 (Racism)、ホロコースト (Holocaust) の内容に入っている。このセンターの入場者は学生 50%、ビジター 50% で、入場料は必要ない。

学校の先生、高校生などに、一日 4 時間、8 週間の講座が開かれ、その後試験があり、試験に合格すればガイドになれる。主に人種撲滅について学ぶ。セミナーには、約 50 人の先生が、毎年博物館に講習を受けに来る。試験は 4～6 年に 1 回行われ、新たに、30 人位のガイドが認められる。ガイドは、50 歳代後半の女性および男性もいる。性比は女性 70%、男性 30% である。しかし、メインは、60 歳代が 70%、70 歳代が 30% である。すでに仕事を引職した人もいる。社会階層としては、中産または、上流階級の人が多い。ちなみにオーストラリアでは、女性はおよそ 60 歳、男性は 65 歳位で退職する人が多い。

話を聞いた後、学生の人生観は変わる。学生、先生、ボランティアといった経路で、生き残った人に学生の感動や感銘が伝えられる。前出の 94 歳になる Mr. Alex Ferson さんは、毎月曜、センターに来る。他にやることはない。唯一できることは、これだ。年をとっているが、私の記憶ははっきりしていると言ひ、次のように話した。

私は 1918 年生まれ。私自身が歴史、私の記憶を学生に伝えることが仕事だ。私はポーランドで生まれた。そこでは、10% の人口がユダヤ人だった。家族と幸福に暮らしていた。町には約 330 万人のユダヤ人が住んでいた。今では 2 万人になってしまった。多くの人は殺された。他の国に逃げた人もいるが国へ戻ってきた人などの他は、アメリカ、オーストラリア、アルゼンチンに逃げた。私の家族の中で私 1 人だけが生き残った。ユダヤ人の町に、ユダヤ人は誰もいなくなった。お墓もみんな壊された。墓石も掘り起こされた。それはあらゆる場所で起っていた。3 年間、ドイ

ツの強制収容所で暮らしていた。収容所では肉体労働をさせられ、食事も十分には与えられなかった。そこでは大きな工場を作られていた。ある時、それが急に中止となった。その後、収容所をたらいまわしにされた。生き残れないと、考えていた。強制労働の中で、他の人々は道端で死んでいった。ドイツのブーヘンバルト収容所にいた時、1945 年 4 月中旬に米国人がブーヘンバルトに来て解放された。そこには元々 50,000 人のユダヤ人がいた。人数を毎朝、広場で点呼をし、毎日、毎日働かされていた。ゲシュタポによって強制されていた。1945 年 4 月初旬、ドイツ人の力の衰えが見えてきた。その時、5,000 人が強制労働を強要されていたが、殺すために働かせられ、道端でピストルで殺されたりしていた。5,000 人が生き残っており、855 人が死んでいた。1945 年 5 月 1 日には、100 人しか生き残っていなかった。最後は、馬小屋に寝ていて、閉じ込められていた。私は近くの小学校の天井裏に隠れていて、生き残った。突然ゲシュタポがいなくなった。食物も水も何もなかった。近隣の人が来たので、隠れていたら、ゲシュタポは去ったと言ひ、パンと残りもののスープをくれた。

まずは米国人が中心になって学校の校舎へ来て、次に、国際連盟が来た。帰る場所がどこもなく、その後 6～7 年収容所にいた人もいる。



写真1 Mr.Alex Ferson さん(左)と、ユダヤ人文化センターにて

(2) シドニー教育委員会

9 月 11 日にシドニー教育委員会で、ユダヤ人

虐殺（ホロコースト）の生き残りの女性（73歳）が、次のような話をしてくれた。

「ポーランドでは多くの人は、とても貧しかった。子ども、高齢者、若者、あらゆる年代の人が汽車に乗せられ、連行された。私の父は、私に何がなんでも生きのびるようにと言った。5日目には、そこがアウシュヴィッツであることが分かった。私は、父母（45歳）、祖父母（75歳）と一緒にいた。ゲシュタポのDr.Hangularが人を選別した。真冬にもかかわらず、水のシャワーで洗われた。ヨーロッパは寒い。SSが来て、早く早くという。雪、雪、点呼、点呼、お金。子ども達は叫んでいた。彼らは、使えるものをすべて使った。人種偏見に対する大罪である。

毎日、50kmも歩かされ、私は熱が出て病気になっていた。薬も何もないので、水を飲んで良くなった。トイレに行くのも、ゲシュタポに申告しないといけなかった。1945年1月27日、500万人の子どもたち、そしてアウシュヴィッツは解放された。

戦後、SS、PSはいなくなり、数日後、すべては終わった。あなた達は解放された、と言われた。私は、どこかへ行く健康状態でなかったのので、病院に収容された。ポーランドから来た私の家族は、みんな死んでしまい、私は家族でたった1人の生存者。私はすべてのアイデンティティを失ってしまったのである。生きるために、ヨーロッパからは遠いけれど、オーストラリアへ来た。1948年に船に乗った。3か月間、エアコンなし、何のコミュニケーションもない生活。誰も英語を話せなかった。英語を必死で習った。オーストラリアで夫と出会い、3人の子どもをもうけた。友人も皆、失った。」

高校生Aの質問：「兄弟は？」「皆、失った。」

高校生Bの質問：「友人は？」「　　ク　　」

「1948年2月26日に、オーストラリアへ船で出発した。村人の内、35人しか生き延びなかった。家族にさようならも言えなかった。

1933年、ヒットラーが抬頭し、「我々こそ選ば

れた人々である。ロシア、ポーランドは、ドイツ人に従うべきだ。」と言われた。ユダヤ人やジプシーは、ローマ時代に国を失った。ドイツ内のユダヤ人は、医者、弁護士 etc. 高いポジションにいた。でも首相など政治的な地位にはいなかった。ヒットラーは、ナチス党に子どもも加わるように命じた。子どもは使われてしまった。また、ナチスは、人々の背番号登録を始めた。共産主義者、アメリカ人、その後援者等である。

『ユダヤ人は店に、入れません。ユダヤ人からは物を買いません。』

ユダヤ人との混血をドイツ人に禁じた。ユダヤ人の子どもは、あわれだった。

11月11日　すべてのシナゴーク（ユダヤ教会）が破壊された。

金持は、パスポートや切符を買うことができた。ヨーロッパは危ないから、多くの失業者は、キューバに行く船に乗船したり、600人はベルギーへ、50,000人は上海へ逃げた。

ナチのゲットー（Ghettos in Zazi）に、1939-1944年60,000人が、ヨーロッパ中では500,000人の人が収容されていた。

ユダヤ人は☆印のついた服を着ないといけ無い。ドイツ系ユダヤ人、フランス系ユダヤ人など。ポーランドにゲッターがあり、そこは死の場所であった。16,000人は飢え死にした。当時、ユダヤ人の子どもは何らかの楽器を弾けた。それでオーケストラをつくれた。」

(3) マウント・フィオリ高齢者ホームボランティア・マネージャーとの会見

高齢者には、普通、重度軽度はあるが、認知症のある人あるが独立して生活できる人もいる。

土曜日は、ユダヤ人にとっては安息日なので電燈をつけない。金曜日の陽が暮れてから24時間は、家族の時間と考えられている。

午前11時にサバの儀式。みんな一緒に参加して、コミュニケーションをはかる。

午前中には、4、5、6歳の子どもと中学生、午

後と夕方には高校生が来て、キャンドルサービス (Candle Service) をおこなう。その後コミュニティサービスの人が加わり、コーヒー・サービスとなり、灯をつける。

小学生は先生と来てモザイクを作る。これには5～6週間かかる。一方、高齢者ホームにも絵の先生がいる。金曜日には、子どもと一緒にハラというパンを作る。みな作り方を習う。ミツバ (good deed) もする。Community に貢献する日のことである。

生き残りの人の30%がホロコーストの生存者 (holocaust survivor) である。月曜～木曜には高校生が話を聞く。親が生存者である次世代 (second survivor) も話をする。2～3人の高校生がグループで、高齢者の部屋へ行って話をする。高齢者の話は、再教育ともなっている。

コンピューターで写真を撮って、孫たちと本を作ったりもする。Hazelさんによると、高齢者はアフリカからの移民の「グラニー」(祖父母)となり、ゲームをしたりする。子どもが高齢者にインタビューをして記録を作る。元オランダ人で当時の記録を残した人もこの施設に入っている。収容所では子どもも、番号を入れ墨をされていた。今でもあるタイプの人や、ひどく傷ついた人は、そこから抜け出せない。他のタイプの人、他人に話すことによって癒される。

①肉体 ②新しいスキル ③プログラムという3つのコミュニティ・サービスからなる Duke of Edinburgh リーダーになりたい人は20時間、コミュニティサービスを行う。ユダヤ教徒の大学生は、全員コミュニティ・サービスに来ることになっている。高齢者で絵の上手な人と、学生と一緒に絵をかく。現役時代、エンジニア、物理学者だった高齢者は、若い時の話をする。週1回、Eメールをする。

経済的に貧しい人は、一部屋に複数の人が入る施設もある。そういう人のために、ユダヤ人が中心になって寄金を集めている。在宅ケアもしている。老人ホームに入らないと生活していけない人

には、政府による審査がある。料理が出来ない、自分自身のことができない人が審査に通過する。

ボランティアについては、520人のボランティアが4つの施設に来ている。1ヶ月に延べ1,689時間、年間36,000時間にのぼる。メンバーの維持、補充、研修をしており各施設で研修をしている。

マウントフィオリ高齢者ホームは優れたボランティア・プログラムで昨年、表彰された。オーストラリアには、施設評価機構がある。

(4) メルボルン・ユダヤ文化会館文書保存ディレクターダニエル・ヘルドマンさんとのインタビュー

シドニーでは20人の生き残りの人が、歴史の語り継ぎを行っている。ダニエルさんによれば、1人の語り部の話は2～4時間のデータ・ベースにして保存している。また、ビデオも撮っている。「シンドラーのリスト」を監督したスティーブン・スピルバーグも50,000人のユダヤ人の、データ・ベースを作った。

2013年1月から「アンネの日記」を書いたアンネ・フランクの展示を行った。

ポーランドからメルボルンに来た人が多く、その他は、イタリア人、ギリシャ人である。ハンガリーからはシドニーに来た人が多い。

1,300人の生き残りの人の証言を保存している。1939年にドイツではユダヤ人の店を壊し始めた。1933年からのビデオ証言者の資料が残っている。

ジャックさんは、証言者でもあるが、ガイドを水曜日と木曜日にやっている。アブラハムさんは90歳であるがガイドの統轄をしており、博物館の理事もつとめている。

鹿島建設が鹿島コミュニティ・ホストセンターをやっており、日本の広島では、ホロコースト記念館が開館している。いつもは、15～16歳の高校生が80～100人位、見学に来るが、小学校5、6年生も見学にやってくる。歴史や国語の時間に

来ることが多い。

1,500人の証人のDVDを、博物館におさめている。子どもだった生き残りの人々に、このことはどのように影響したのか。米国のワシントンの国立公文書館でも生きのびた人々の記録が残されている。メルボルンで、記録に残されている150人にのぼるロシア人証人の語りは、まだ文字化されていない。



写真2 高齢者が歴史の授業を行っているユダヤ・ホロコースト博物館

(5) 小学生の歴史の時間

私が訪問した時には私立のマウント・エリザ小学校 (Mt. Eliza Primary School) の生徒が訪ねてきていた。ユダヤ・ホロコースト・センターの教育主事であるスティーブさんが、まずは1930年代からの世界情勢について説明し、ドイツ、イタリア、日本の三国同盟、ナチスの国家社会主義労働者党の成立、米国、英国、フランスなどの連合国の動静について話していた。まずは、子どもからの質問を模造紙に書いてもらった。子どもたちの質問には以下のようなものが出された。(1) どのようにしてそれは起こったのか。(2) ホロコーストの意味は？(3) ナチとユダヤ人の関係は？(4) 人々にはなにが起こったのか。(5) 犠牲者にはどんなことが起きたのか。(6) 何人の人が生き残れなかったのか。(7) どうしてユダヤ人がターゲットになったのかなどである。

ホロコーストのホロ holo はギリシャ語で holos, entire complete を、caust は destruction by

burning を意味するもので、ヨーロッパのユダヤ人の絶滅を意図していたこと、第2次世界大戦中、ドイツのナチスの協力者たちは、10万人にのぼる人々が、子どもや幼児を犠牲にしたことが語られた。

どうしてホロコーストが起こったのか。人種との関係は？特定の人種が危険である。ある人種は優れていて、他の人種が劣っている。それには遺伝子に関係しているという考え方が、当時強まっていた。しかし、現在、地球上に生存している人類はすべてアフリカを起源としている。皮膚の色が異なる民族が存在しているが、これは太陽光線とかビタミンDの吸収なども影響している。本当に、ドイツ人こそが優れた人種であり、ユダヤ人は、いまわしい人種なのか。アリア人が優れていてユダヤ人は劣っているのか。しかし、誕生については変更ができない。所属、責任、行動については、バイブルとの関連が強いのである。



写真3 「勇敢な行為」をした人として、シンドラーや杉原千畝の写真が掲げられている。

この生き残びた人のお話を聞きにきていたのは、ジェルズパーク小学校 (Jells Park Primary School) の5、6年生の生徒で、生徒は同色の生徒の名前が染めあげられたTシャツを着て、聞きに来ていた。

アブラハムさん (90歳) の話

私は、服飾関係の街で生まれた。1939年、ユダヤ人が経営する店々を、ナチスが壊し始めた。

そしてポーランド全域にユダヤ人のゲットーを作っていた。

そのゲットー (Getto) には約 400 人の人がいた。その後強制収容所 (concentration camps) に追いたてられ、最後はアウシュビッツに連行された。1944 年には 60,000 人のユダヤ人が収容されていた。ユダヤ人は普通は馬や牛をのせて運ぶ荷車にのせられて運ばれた。

収容所につくと 2 グループ、働ける人と働けない人に分けられ、アブラハムさんは働ける人のグループへ、アブラハムさんのお母さんは、働けない人のグループに入れられ、ガス室へ送られてしまった。

1944 年、アメリカ軍が来た。小学生の子どもの一言、「もっと教えて。とても興味深い!」。当時は、ユダヤ人の血液型、イスラム教徒の血液型、キリスト教徒の血液型が異なると信じられていた。殺されたり、亡くなった人のボタンの展示がされている。色、形、サイズが夫々違う。



写真4 アウシュビッツの強制収容所

オーストラリアは、世界で 2 番目にユダヤ人が多く移民してきた。50 万人にのぼるユダヤ人が国外に脱出した。アンネ・フランク、そして父親のエド・フランクらは屋根裏に隠れていたが、密告によって、捕まってしまった。また、ワインセラーに隠れていた人も、捕まえられた。

日本の外交官で当時リトアニアの領事をしていた杉原千畝は、ポーランド等欧州からナチス・ドイツの迫害から逃れてきた約 6,000 人のユダヤ人

に大量のビザを発給してユダヤ人を救った。杉原千畝、シンドラー等、8 人の勇気ある行動によって、日本経由で自由の港であった上海に、私を含めて 1,500 人のユダヤ人が逃れてきた。全体では 150 万人が亡命した。

(6) 生き延びたアブラハムさんと高校生との質疑応答

生き残りのアブラハムさんと、高校生との質疑応答は以下のようなものであった。



写真5 生徒に話をする教育主事のスティープンさん (左)、右はアブラハムさん

高校生：両親は何をしていたのか

アブラハムさん：13 歳で戦争が始まった。両親は、紡績工場を持っていた。1939 年 戦争が始まった。ヒットラーの、白人でブロンド髪の優性種の宣伝が盛んになり、新しい国に新しい土地、すなわち植民地が必要だとの主張が声高に広がって行った。

高校生：どういふところに住んでいたのか

アブラハムさん：ゲットーに住んでいた。ゲットー内の小屋に住んでいた。大きなゲットーで、その住人の 50% が死に絶えた。

高校生：どういふ生活か

アブラハムさん：薬もない、食べ物もない、仕事と言えば強制労働をさせられた。普通の人間が一日 2000kcal 必要なのに、700kcal しか与えられ

なかった。

高校生：強制労働とは？

アブラハムさん：実際に、給料をもらうことはない強制労働だった。

高校生：どのような工場で働かされたか

アブラハムさん：靴の工場、タイルの工場、軍服を作る工場などで働かされた。最後に解放されたときは、やせ細って体重が29kgになっていた。人類に違いはない。私は偏見でひどい経験をした。人は他人をいかに尊敬するかが大切だ。いじめに遭った時は、黙っていると私たちになるから、それに対して黙って沈黙しないで、何か行動をおこしたり、介入しなさい。早いうちに行動をしなさい。

高校生：当時はどういう状況だったのか

アブラハムさん：当時15, 6歳だった。ポーランドには、ゲッターが400位あったよ。

高校生：逃げた人はいなかったのか

アブラハムさん：逃げられない。1歩でも出たら、ポーランドはドイツに占領されていたので、逃げられない。

高校生：ゲッターは戦争前の生活とどう違うのか

アブラハムさん：1軒の家に50人位住んでいた。

高校生：ゲッターに収容されてからその後どうしたのか

アブラハムさん：僕はアウシュヴィッツに連れて行かれた。各地の収容所へ、家畜運搬用の荷物列車にずっと立っている状態で連れて行かれた。トイレもなく、何日もかかって連れて行かれた。

高校生：お母さんは、どうしたの

アブラハムさん：収容所に母はいたけれど、私は仕事ができるから生き残れたが、母は働けないか

らガス室へ連れて行かれた。ガス室に行く前に一瞬出合った時、母は、生き残って、ここであったことを、伝え続けなさい。何万何千の生き残れなかった人は伝えられないので、お前が伝えれば、その人たちがいたことを伝えられる。ユダヤ人は600万人が亡くなった。1人1人の犠牲者には名前があり、家族があった。メルボルンのクリケット場は10万人収容できるけれど、数で何万死んだというのには意味がない。

(7) カレッジ・トゥ・ケアー q (Courage to Care)

プログラム

これは、1992年に始まった。どのようにして始まったかという、1人の人を助ける人もいるし、杉原千畝のように多くの人を助けた人もいる。いろいろな人が助けた。一人一人の学生が、いかに力を持っているかに気づかせるのが、このプログラムの目的である。どのように、誰によって助けられたのかを大切にしている。26枚のパネルに多くの人々のことを説明している。そこには、ホロコーストの生き残りの人々の口から語られていることを載せている。少人数のグループでも語ってもらう。生徒や学生たちに、自分の中でどう受け止めてきたかを考えさせて、痛みを感じさせる。

例えば、ホロコースト以外でもサラエボやカンボジアなどのことも考える。どのように偏見をなくしていくのか。どういう偏見が何を起こしていくのか。本当に普通の人がどんなに力を持っているかを気づかせる。また、その後のフォローアップをし、学校でいじめがあるところで、その後何が起きているかを、学校も、この団体(Courage to Create)もフォローアップして、振り返りをしている。

“Courage to Create”という名前前で、生徒が学んだあと art teacher がダンス、詩、絵を描いたり彫像にしてもらおう。一日、見学に来てもらった

だけではなく長い間考えてもらいたい。点を線にする。変わってもらわないといけない。一滴の水であっても波紋をどんどん広げて行ける。学業に困っていたり、学校に行けない引きこもりの子どもにとっても効果がある。証人の話を聞くプログラムに参加してもらうことによって、子どもは分かる。(1)出前する(2)学校とか、公民館で行なうという2つの方法をとっている。そういった方法で、学校で上手くやれるようになったり、学校へ行けるようになる例が多い。

口から口へ広がって行って、何の宣伝もしていない。プログラムを行う3週間前に、先生たちへ説明する。簡単にはいけない離れた場所で展示をする。生徒に教える前に、教師に教える。登校拒否などがある特別な学校や、病院のスタッフに焦点をおいて、一緒に考える。

人は何に人たちといった偏見を持ちがちである。特にロシア人患者はソヴィエトの方式を持ち込んで、自己主張をする。ソ連から来た人は、自国で言わないとやってもらえなかったの、病院内へ食べ物を持ち込んでくる。そうすると、あ〜マルタ人は、ギリシャ人は、ということになるが、もっと器を広げて考える必要がある。これは、アンティ・偏見プログラムでもある。本当に人を見ないということを止めさせるために、ホロコーストの話を使っている。このプログラムは、もともとはユダヤ人のチャリティ団体であるベネバリー・プログラムが始めた(1992)が、現在は Courage to Care がおこなっている。これはユダヤ人を対象にしたプログラムではなく、アンティ偏見グループの活動で、ファシリテーターもユダヤ人だけでなく、他の人が多い。

ボランティア 60~70人、生き残りの人々には、支払いはされない。シェパートンで2週間展示をおこなったが60人全員、ボランティアである。歴史上、ひどいことが起こったということを教えるのではない。偏見によって、いかに人を傷つけるかを考えてもらうフェイス・ブックもやっ

ている。

16歳や17歳の子ども、多文化(イスラム、ユダヤ人)の子どもがフットボールをする時にも、理解しておく必要があることがある。多くは難民であり、ある学生はイランからの難民であり、パキスタンを通過してオーストラリアに来たが、母国では全く教育を受けていない。展示会の前に、その地域のヒーローを見つけ出す。スーダンのコミュニティは荒れている。その人達は、警察と必ず衝突する。そのような時10代の生徒や学生であっても、スーダンからの移民と警察の間に立ってくれる。

パキスタンで両親を亡くして、オーストラリアに来た学生がいる。その子は生徒会長になり、その高校がとてつもない学校に変わっていった。決して有名な人である必要はない。隠れたヒーローを上手に使って、地域を変えていく。

どのようにするかについては、以下の通りである。展示会をする前に、コミュニティや教会等と話をするうちに、地域のヒーローになりそうな人を捜す。本当に普通の人、学校や、その地域を変えていく人。その過程で、賞などをあげると「自分は何もしていない。」と言う。

小さいことをすることによって、世界を変えられる。例えばイスラムの子と、ユダヤ教の子が、サッカーチームを作ったが、上手くいかなかったが、ローカルヒーローが出てきて、チームが上手くいった。

このプログラムには、州の教員局から少額、さらに慈善団体および州の移民関係の予算からも少ないが寄付が入ってくる。例えば、サッカーをやる時のスニーカーの紐を新しくする費用に使える。

ある学校に電話をしたら、中3、高1の子が7人も自殺をはかったという。本当に田舎の学校なのである。最初の計画だと公民館で行う予定であったが、そこに来るバス代もないというので、その学校へ行った。精神科の医師や心理学者も含

めて、計画を作り直した。

生徒が家に帰ったら、インターネットでのいじめが待っている。過去5年間は孤立した状態で、親も教師も手をつけられなかったが、Courage to Care が少しは役に立っている。

(8) マリアナ・マイク (1929年生まれ ハンガリー出身) さんとの会見

私は戦争が始まった時には、わずか10歳(1939)だった。それから日に日に状況が悪化した。ゲットーから強制収容所に送られた。まずアウシュビッツ、それから他の収容所に送られた。



写真6 前列左がマリアナさん、その隣は娘婿のマシモさん

その頃 ハンガリーでは反ユダヤ人の動きが激化して、ドイツ軍が来る前に殺されたり、ユダヤ人が襲われたりしていた。

解放後命からがら、故郷に帰ってきた頃には、故郷の村からユダヤ人たちが連れ出され残ったのは、たった3人だけだった。それはマリアナと母とマリアナの父だ。その3人が生き残っただけであった。

その後、故郷を捨ててパリに行き、他の国へ移民するつもりで許可証を取得できるのをそこで待った。幸いな事に、かつてブタベストに住んでいて、以前ブタベストでブラジャーやコルセットに使うゴムを作っていたマリアナの叔父が7年前(1938頃)にオーストラリアに移住し、シドニーでもゴムの工場を経営していた。そんなこともあって、オーストラリアへ移民する許可証は、それほど待たずに手に入った。

(9) メルボルン郊外のグルー・ウェバリー高等学校 (Gleu Waverly High School) での実践スペイン系のマリサ・コドラさんとドイツ系のレモーナさんとの話を次に記す。

この高校には3年プログラムがある。この地域の高齢者はプロダクティブ (生産的) であることが重要であると同時に、健康問題に関心がある。学生は社会心理的 (Psyco-Social) な関心があり、公衆衛生や老年学の先生がこのプログラムに関わっている。高齢者と学生の交流は双方を幸せにする。

子どもは技術や言葉を学ぶことができるが、これは表層的なことであって、多くのプログラムは、学生たちの生命や生活への向き合い方、態度についてチャレンジをしているが、本プログラムはそれを超えるものとして超戦している。

このプログラムには、モナッシュ大学が連携しているが、モナッシュ大学は、オーストラリアだけでなく、世界の他の国々にもキャンパスがある。それは南アフリカのヨハネスブルグ、北京、ダーバンなどである。この大学に進学するのに必須の高等学校での授業は、中国語、スペイン語、フランス語がある。

グルー・ウェバリー高校は、現在、神経科学で、研究費を続けて取りたいと考えている。高齢者は、年を取るほど母国語が強くなるというが、新しい言葉への記憶力が弱くなるからではないかと考えられる。

中国人ボランティアの凱さん(94)は次のように話す。「若者は、私たちにコンピューターや英語を教えてくれる。また、私たち高齢者は、中国語を教えることができる。」コンピューターの習得には級があり、コンピューターの専門用語を英語で学んでいる。しかしこのプログラムは、本年度で助成が終わってしまう。

iPadなど、新しいテクノロジーを使って、第1言語だけでなく第2言語に興味を持ってもらうことが大切である。

クラスの進め方は、いつもは、トピックスがあってみんなで話す。モナッシュ大学のホームページを見てもらうとよく分かる。

この授業は、10月末または11月に行なわれる大学入学試験の一部となっている。高校のランキングで、とても良い成績を持つ学生を輩出している。この授業内容は、語学の成績としてカウントされている。

高校生の第1言語は英語である。オーストラリア生まれの中国人の第2言語は中国語が多い。スペイン語、ドイツ語は、オーストラリア人の学生が第2外国語として習う。必ずしも、スペイン系、ドイツ系の学生ではない場合も多い。各州で大学入試テストがある。

マリサさんが困難なこととしてあげるのは、例えば若い人が department store と言うのに高齢者は百貨店と言うように、世代間で語彙が違うことである。中国語についても上海語、広東語、北京語、方言がある。しかし、高校生との授業を6か月くらい経験した高齢者は、教え方を会得する。

マリサさんは高齢者に対して、「あなた達は、天使ですよ」と感謝の気持ちを表わす。高齢者は、授業に貢献した証書を授与され、11月23日にはモナッシュ大学でおつかれ会が開催される。



写真7 グルー・ウェバリー高等学校での高齢者と高校生の授業風景

モナッシュ大学の教授によると、これは Dr. Michel Clein がデザインしたもので、モナッシュ大学からメルボルン大学に広がり、その後ま

た、モナッシュ大学に戻って来ているという。定例会が1ヶ月に1回開かれていているが、高齢者自身が団体を組織している。

20人の高齢者と20人の若者が同数でグループを編成し、2セッション話し合いをする。男女の数は、考慮に入っていない。

高校生はシンガポール、マレーシア、香港出身で、英語で学校教育を受けてきた者は中国語は話せない。従って、この交流を通して、書く力、話す力が養われ、大学入試に役に立つが、多文化研究や多言語理解にも役立っている。

この交流の前後に、高校生は語学能力試験を受けている。また高齢者は、自らのアイデンティティを求め、健康や加齢に気づかい、自らの文化に誇りを持っている。

4つの高校で、中国語、スペイン語、ドイツ語、フランス語の授業があり、オーストラリア連邦政府委員会、オーストラリア研究委員会、オーストラリア学校教育委員会が後援している。

しかしオーストラリアに移民してきて、人種差別にさらされた高齢者は、「私は英語を、絶対に習いたくない」と言い、10人中1人しか、英語を習おうとしない。オーストラリア政府は、高齢者に英語を習うようにといったことはない。高度なテクノロジーを使って、神経組織を刺激している人がいる一方で、神経組織を孤立させてしまい、他の人に会わないので、神経細胞が死んでしまい、ニューロンの数が減る人が出ている。そうになると情緒的アイデンティティ、自己統一性、自分が誰なのか、生きていくことの意味が分からなくなってくる。言葉を習得すると、脳の言語野の中心部を刺激する。新しいことを学ぶことは、脳科学的に大切であると、プログラム・コーディネーターのジェラルド・ベイト氏は言う。

4. 考察

ドイツやポーランドなどヨーロッパ諸国から移民して来た約10万人のユダヤ人高齢者が子供たちに語り継ぐ戦争体験やホロコースト、ゲッター

体験などの一部が明らかになった。オーストラリアは、ヨーロッパから移民したユダヤ人が世界で2番目に多い。このオーストラリアに移住したユダヤ人が中心となって、彼らの体験を1930年代から第2次世界大戦までのヨーロッパに何が起こったのかを語り継ぎ、小・中・高等学校やユダヤ人センターで州政府の正規の歴史の授業として登録されている。またメルボルン郊外の高等学校で行われている多民族、移民社会での世代間交流プログラムでは、地域のドイツ系、フランス系、中国系等の高齢者と、高校生が様々な言語で互い

に話し合う世代間交流が、大学進学に必要な授業科目の一環として行われていた。「歴史の語り継ぎ」と同時に現在のオーストラリアが抱える多文化社会の課題解決の方策の一部も明らかになった。

なお、本研究はモナッシュ大学のスーザン・フェルドマンさん、ニューサウスウェールズ大学のカズヒロ・マシモさんの協力があったものである。ここに感謝の意を表したい。

「発達障害のある大学生への就労支援プログラムの開発」

発達臨床学科 堀江 まゆみ

1. はじめに

最近、大学におけるキャリア支援の中で重要性を増している問題が、発達障害のある学生に対する支援である。2005年～2006年の厚生労働省の調査によると、発達障害のある当事者の高等教育機関進学率は36%となっている。また、日本学生支援機構の2011年度調査によると発達障害のある学生が在籍する大学は455校で全体の58.6%であり、初めて5割を超えたと報告されている。発達障害の学生のための学生支援室も各大学に設置されはじめ大きな役割を果たしている。休憩室の確保、学生に合わせて実技や実習に配慮する、授業などの注意事項を文書できめ細やかに伝達する、教室の座席位置などへの配慮、講義内容録音を許可する、など大学生活をスムーズに送るサポートをなんらか実施しているのは371校、47.8%であった。

しかしながら大学における就職活動に関する支援はまだ十分ではない。発達障害学生の多くに社会的コミュニケーションの困難さがあり、就職の際の特に面接試験で不採用になることも少なくな

い。大学時代のアルバイト面接でも同様なことが起きており、学生時代いちども就労体験をする機会がなかったという発達障害学生も珍しくない。繰り返しこのような経験を体験してしまうと、もともと苦手意識が高いところにさらに自己肯定感の著しい低下が起これ、社会との接点を持つことや就活自体が進まなくなってしまう。発達障害学生は職種によっては障害特性を活かしてIT企業など活躍できる可能性があるのだが、面接試験でつまづき高い能力の評価を得るまでにたどり着けないこともしばしばである。

また、大学の進路課（あるいは就職課）では発達障害学生を把握できていない、あるいは発達障害の理解自体がかなり乏しいのが現状である。例えば学生が、発達障害に合わせた就職支援を求めるときには大学に対して自分の障害を明らかに説明する必要があるがカミングアウトの難しさがある。それ以前に発達障害の青年の未診断問題があり、就職活動を始める時期に自分の障害を認識している学生は多くない。もし障害者手帳を取得している場合は障害者雇用枠での就職も可能だが、